

デューイの反省的思考 (reflective thinking) の適用

— 成人看護学臨地実習Ⅰの取り組みに関する報告 その1 —

呉大学看護学部

松原みゆき 佐々木秀美 山下 典子
松井 英俊 岩本 由美 田村 和恵
小柳芙美子 河野寿美代

論文要旨 成人看護学講座においては、初年度より看護教育及び看護の実践の場で広く適用されている、看護過程を取り入れた臨地実習を行っている。そこでは看護過程と看護技術を結び付けて学習することが必要である。看護過程の思考方法は、デューイの思考過程を看護過程に取り入れられたことに始まると言われている。そこで、平成15・16年度成人看護学臨地実習Ⅰでは、デューイの反省的思考を取り入れ臨地実習を行い、その実施過程の報告を行った。

実習方法は、原則として、土・日曜日を除き、病院での臨地実習を5日間、学内での実習（オリエンテーションと反省会を含む）5日間の内、3日間反省的思考を行う時間に当てた。その流れは、グループ毎に臨地実習を進める中で、看護過程を通して重要であると考えた看護技術を取り上げ、振り返る作業を行った。グループ毎に、なぜその技術を取り上げたのか理由を明確にして、事例を挙げて看護過程に沿ったレジメを作成した。発表は、1グループ30分間で、実技を伴う発表と発表後学生や教員と質疑応答を行った。

反省的思考を成人看護学臨地実習Ⅰに取り入れることは、佐々木がデューイの『思考の方法』を手がかりに看護教育において「一つ一つの問題を綿密に考えていくようにしていくことが思考の訓練であり、それが学習である」と仮定している。さらに「経験をし、分析する思考態度の育成が良質の看護を提供することにつながる」ことを明確にしたい。

キーワード：デューイ、反省的思考、看護過程、看護技術

■ はじめに

近年臨地実習時間の短縮、看護の急激な大学化、臓器移植や免疫治療等の高度先端医療の進歩など、看護学生を取り巻く医療や社会の環境は大きく変化している。それに伴い、看護技術力の低下が指摘され、平成15（2003）年には厚生労働省より「臨地実習において看護学生に許容される基本的な看護技術の考え方（案）」の指針が示され、本大学においても、検討を行っているところである。

成人看護学講座においては、初年度より看護教育及び看護の実践の場で広く適用されている、看護過程を取り入れた臨地実習を行っている。そこで

は看護過程と看護技術を結び付けて学習することが必要である。まず看護過程の成立過程を振り返ると、その思考方法は、20世紀初めアメリカのコロンビア大学看護学部において、ジョン・デューイ¹⁾（John Dewey以下デューイとする）の思考過程を看護過程に取り入れたことに始まると言われている²⁾。佐々木秀美は、デューイの反省的思考（reflective thinking以下反省的思考とする）を看護場面における思考作用に適用することを提言³⁾している。そこで、平成15・16年度成人看護学臨地実習Ⅰでは、デューイの反省的思考を取り入れ臨地実習を行った。その実施過程の報告を行う。

*連絡・別刷請求先

まつばら みゆき

〒737-0182 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

■ 目 的

本稿の目的は、2003年度成人看護学臨地実習 I において、このデューイの反省的思考を取り入れた臨地実習の実施過程の報告を行うことである。

■ 反省的思考に関わる先行研究の分析

デューイは反省的思考を以下のように定義している。「物自体 (thinking themselves) のなかに含まれる真の関係にもとづき被暗示事項に対する信念を誘導するという方法において現前の事実が他の事実即ち真理を暗示する精神活動 (旧仮名遣いは筆者が現代仮名遣いに改めた)」⁴⁾である。反省的思考は1930年代のデューイに始まり、1980年代にはデューイの教育学から影響を受けたショーン (Donald A. Schon以下ショーンとする)⁵⁾が反省的实践家 (reflective practitioner) の専門家教育を唱えている。そこに共通するのは、リフレクション (reflection 振り返り 以下リフレクションとする) という概念である。教育心理学辞典によるとリフレクションとは「さまざまな経験を繰り返す過程で、自分の活動を振り返ることによって、その活動の論理を引き出す思考」⁶⁾とある。近年では、ショーンの影響を受け、看護教育においてリフレクションを導入している研究が見られるようになり、イギリスを中心に多くの実践報告や研究が現われ、教育ツールとしてのリフレクションは看護専門教育においても重要性が実証されている。

本田多美枝は、看護におけるリフレクションの外観を報告⁷⁾している。まずショーンの「反省的实践家」という新しい専門家像を基本に、看護における反省について以下のように述べている。リフレクションとは、ショーンの著書による影響が大きく、看護における反省は、2に分類され、1つは「行為過程における反省 (reflection-in-action)」である。つまり、実践家が展開する複雑で不確実な状況での取り組みについての議論である。もうひとつは「行為についての反省 (reflection-on-action/reflects on reflection-in-action)」である。つまり、事後的な振り返りと関連しており、経験 (実践) から学びを深める学習のあり方として評価され、議論されている。つまり、出来事の後、あるいは出来事から離れたところで行われる回顧的な反省 (retrospective reflection) である。特

に、看護学生を対象にした報告が多くあり、その理由は学生にとって「行為過程における反省」は困難であるという見解とも関連している。そのため、実践した後で行われる「リフレクション」が重視されている。本田は以上のように述べ、看護学生にとって、実践した後で行われる反省は学習のために重要であることを示唆している。さらに『反省的看護実践』の基礎的理論は、日常の看護の営みを説明する視点を提示しており、それぞれの看護職者のおかれた状況に応じた学びを深める基礎的理路として活用できる可能性を実証⁸⁾している。

看護学生を対象にした報告として、上野玲子らは1年生を対象にコミュニケーション技術教育にリフレクションを取り入れた報告⁹⁾を行っている。田村由美らは、主に基礎看護学領域において、イギリスオックスフォード・ブルックス大学における教授方法のリフレクションを応用した一連の報告¹⁰⁾を行っている。武藤眞佐子らも成人看護学臨地実習領域のリフレクティブシンキングについて報告¹¹⁾している。

また教師側の振り返りに焦点を当てた研究については、村松照美は、健康学習実践における保健婦の力量形成プログラム開発¹²⁾を行っている。それは、教育学者の澤本和子らの行った、今日の教師教育研究において、反省的思考に注目した研究¹³⁾から、澤本のいうリフレクションの方法を下敷きとしている。また辰巳理恵は、臨地実習における指導者の関わり¹⁴⁾に焦点を当てている。つまり臨地実習指導者である自分自身を研究対象として、自己のあり方を探求し、成人看護学実習・急性期で各論実習が開始となり初めての臨地実習における教育的関わりの構造を明らかにしている。その他看護教員に焦点をあて授業の振り返りを行ったものとしては、吉村恵美子¹⁵⁾や長井睦子ら¹⁶⁾の報告がある。

一方青木由美恵は、看護におけるリフレクションの潜在的問題について3点報告¹⁷⁾している。まずリフレクションを行う者の価値観や自分自身を脅かすことにもなりかねないこと、情報の所有権・自治権の尊重・専門職間の守秘と信頼など倫理的な問題を挙げている。2つ目は指導する教師側や学習グループの精神的な負担が増すこと、3つ目はリフレクションをすることにより実践の場で衝突が起こる可能性があることを挙げている。同様に本田もリフレクションを概念化することの難し

さを指摘¹⁸⁾している。

■ 教育目標

成人看護学臨地実習Ⅰでは、デューイの定義する反省的思考を基本理論として、学生の行った臨地実習の振り返りを行った。佐々木がデューイの『思考の方法』を手がかりに看護教育において仮定している、「一つ一つの問題を綿密に考えていくようにしていくことが思考の訓練であり、それが学習である」¹⁹⁾。さらに「経験をし、分析する思考態度の育成が良質の看護を提供することにつながる」²⁰⁾ことを明確にすることを目標にしている。中津川順子もデューイの経験論を実習教育に生かす重要性を提言²¹⁾している。

佐々木は、看護における一場面を例示して、デューイの反省的思考を看護場面における思考作用に適用して説いている²²⁾。それは検温の時、脈拍をとっていた看護師が患者の手のにおいが気になった場面である。“臭う”ということの意味するもの、それは清潔が保てていないのではないかということを暗示する。そのことを確かめるために看護師は患者の手を含め全身を観察し、いつから入浴をしていないか患者及び家族らに尋ね、看護記録を確認するなどの知性的整理を行ない、「1週間入浴していないことにより掌に垢がたまり臭う」という仮説を立て、患者の全身状態も分析し、これらの情報を統合する。

例えば脳出血後1週間目でありバイタルサインが安定していないことから再出血の可能性がある、今日は清潔援助として手浴を行うことを選択する。たとえば言語的コミュニケーションができない患者で得られる情報が少なくても、その中から考え、思考していく過程が看護である。

この場面は看護過程を展開し、実践しており、この過程には、デューイの反省的思考の要素が含まれている。以上の過程を看護学生が行う臨地実習の場面に置き換えることは可能であると予想できる。つまり、佐々木は、デューイの反省的思考の方法として5項目²³⁾を適用する。1) 暗示、2) 知性的整理、3) 仮説、4) 推論作用と分析、5) 検証である。暗示は情報収集の手がかりになり、集めた情報は整理され、一つの仮説が得られたら、分析され、統合されて結論に至る。この方法を用いて、反省的思考をすすめたい。

■ 実施方法

1. 期 間

期間は、2003年10月14日～11月21日までの成人看護学臨地実習Ⅰである。

2. 発表内容

発表内容については、表1成人看護学臨地実習Ⅰ発表内容を参照されたい。

3. 呉大学での授業の進め方

呉大学での授業の進め方は以下のように実施している。

- 1) 大学看護学部成人看護学では、8単位の実習を成人看護学臨地実習Ⅰ(2単位)、成人看護学臨地実習Ⅱ(3単位)、成人看護学臨地実習Ⅲ(3単位)に分けて、全8単位を必修科目として臨地実習を行っている。
- 2) 3年生は5人または6人から構成される20グループに分かれている。それを大きく3つに分類する。第1期の1～6グループ、第2期の7～13グループ、第3期の14～20グループである。1人の教員が1グループを担当し、実習指導を各施設の臨床指導者らと一緒にやっている。
- 3) 原則として、土・日曜日を除き、病院での臨地実習を5日間、学内での実習(オリエンテーションと反省会を含む)5日間の内、3日間は発表を含む反省的思考を行う時間に当てる(表2平成15年度成人看護学臨地実習Ⅰ日程表を参照されたい)。
- 4) グループ毎に臨地実習を進める中で、看護過程を通して重要であると考えた看護技術を取り上げ、振り返る作業を行う。
- 5) グループ毎に学内実習室で、取り上げた看護技術を繰り返し練習する。
- 6) グループ毎に、なぜその技術を取り上げたのか理由を明確にして、事例を挙げて看護過程に沿ったレジュメを作成する。
- 7) 発表は、1グループ30分間で、実技を伴う発表と発表後学生や教員と質疑応答を行う。20グループではあるが、実習配置の関係上、発表は全部で21グループ行った。
- 8) 全グループ終了後、教員からコメントをする。
- 9) 発表の様子はビデオテープに収録する。
- 10) 成人看護学臨地実習Ⅱ終了時に、学生を対象にアンケート調査を行う。

表1 成人看護学臨地実習Ⅰ発表内容

発表日	グループ名	病院名	病棟名	学習内容	名前	年齢	性別	事例紹介	経験後の反省的思考
10月26日-27日	1	Y病院	慢性期病棟	そう痒感に対する援助—肝硬変でハッカ水の貼付をする患者	A	72歳	女性	肝硬変・肝不全の患者	肝細胞実質の障害により黄疸が出現し、そう痒感が生じている患者の看護を振り返る
	2		呼吸器等の内科	死後のケア	B	80歳	男性	肺癌が肺転移しており、呼吸不全となり呼吸停止を来して心停止となった患者	実習中、二人の学生が死後のケアを体験することができた。死後のケアは授業でデモンストレーションはせず、プリント上で学んだだけだったので、グループ内でその実際を話し合い、学びを共有した。死後のケアは、患者さんに行える最後の重要なケアであり、希少な体験であるため振り返る
	3		外科・整形外科	呼吸音と肺音の測定部位と順序	学生2名	22歳	男性	健康な成人男性	呼吸音と肺音の測定部位と順序を明確にするために振り返る
	4	S病院	整形外科	一般論とK氏の比較による左大腿骨頸部内側骨折患者のリハビリ	C	70歳	女性	左大腿骨頸部内側骨折の患者	老年期であるため、身体の衰退が著明であり、床上安静（ベッドアップ80度まで、バルーン留置）が必要な患者のリハビリを振り返る
	5		内科	失語症のある片麻痺患者の寝衣（かぶり）の着脱	D	76歳	男性	脳梗塞（右中大脳動脈の閉塞）により、感覚性失語症、右上下肢完全麻痺、神経因性膀胱がある。既往歴として、昭和63年に糖尿病、高血圧、高脂血症もあり、全介助が必要である患者	寝衣（かぶり）のシャツしか持っていない片麻痺患者の寝衣交換について、技術を高める必要があるから振り返り
	5	M病院	内科・外科・皮膚科	四肢・体幹麻痺患者の石鹸清拭	E	48歳	男性	くも膜下出血（右対側動脈解離性動脈瘤）・水頭症 既往歴：高血圧・高脂血症・脂肪肝の患者	E氏は、四肢・体幹の麻痺・呼吸・嘔吐・嚥下・排尿・排便に以上をきたしている状態である。そのため、皮膚の乾燥、角質の脱落、発汗による汚れがあり不快に感じている。自分でセルフケアをすることができない。また気管切開による人口呼吸器装着をしているのでその不快感を伝えることが難しい状態にある。これは清潔の維持が困難であることを意味し、Yさんにとって精神的苦痛、褥瘡や感染を起してしまう危険がある。ただ清拭するだけではその汚れを拭き取ることは困難であり、石鹸を使った清拭を行い、清潔の維持に努めていく必要があるため、振り返る
6			循環器	左大腿骨転子部外側骨折患者のリハビリ&ビデオ	F	83歳	女性	10月1日転倒による右大腿骨転子部骨折（外側骨折）のため観血的手術を実施。10月15日から荷重1/3許可となった患者	今年に入り2度目の骨折であり、年齢からも骨粗鬆症と筋力低下が考えられる。さらに長期臥床による筋力低下と再転倒・骨折の不安は大きい。そのため筋力の増強を図る必要がある。その際、年齢や視覚障害・聴覚症状を考慮し、指導を行う必要があるため振り返る
2003年11月5日と7日	7	Y病院	慢性期病棟	ADL拡大のための援助—血行促進のための足浴	G	79歳	女性	慢性心不全、気管支喘息のため入院中で、脳梗塞の既往があり、左下肢の不完全麻痺があり、リハビリを行っている患者	終日ベッド上で過ごし、入院前と比べ、運動量の減少と心不全と貧血による末梢の血行障害があり、下肢の血行を促進することにより、リハビリの効果が上がり、自身をつけて歩行することにつながるため、振り返る
	8		呼吸器等の内科	死後のケア（処置）と解剖	H	61歳	男性	肺癌、肝硬変、食道静脈破裂 平成9年から肝硬変、糖尿病でK病院に入院していたが不規則で、コントロールも不良。平成14年10月左胸水有り。平成15年5月・咳が出て、左上葉、左肺門部に発生した肺癌が右上葉に転移。すでに上大静脈症候群（上大静脈閉塞症候群とは上大静脈が外部からの圧迫や血管内閉塞により、心臓への血液の循環障害をきたして、顔面・顔面・上肢にうっ血を生じる症候群。原因には、右上葉肺癌で右傍気管リンパ節や前縦隔リンパ節に転移した場合に多い。）が完成し、右胸鎖群皮静脈拡張（メズサの頭）、食道狭窄も顕著	死後のケアと解剖を見る機会が少ないため、振り返る
	9		外科・整形外科	2事例の床上安静患者の寝衣・シーツ交換	I	70歳代	女性	左肺腫瘍 悪性胸膜炎 平成14年6月左肺腫瘍切除術を受け、平成15年6月から8月、化学療法目的でY病院に入院し、その後自宅療養となる。10月下旬ころから労作時に息苦しさ、倦怠感、ふらつきが増し、入院となった患者	I氏やJ氏のような様々な患者について、疾患の病態を知り、状態別にみた上で、基礎看護実習で実践した基本的な看護技術に応用させ、技術を適応させていく必要があるため振り返る
		J			80歳代	男性	平成15年10月に転倒により右大腿骨頸部骨折で入院中の患者。既往歴として不安神経症がある		
	10	S病院	内科	全身清拭—脳梗塞による左半身不全麻痺・失語症、感覚障害のある患者	K	76歳	男性	脳梗塞（右中大脳動脈の閉塞）により、感覚性失語症、右上下肢完全麻痺、神経因性膀胱がある患者。既往歴として、昭和63年に糖尿病、高血圧、高脂血症もあり、全介助が必要である	脳梗塞による感覚障害・片麻痺による体位保持困難・失語症による意思疎通困難のある患者に対して、どのような方法を用いれば、清潔を維持でき、精神的安定、爽快感を味わってもらうことができるかという疑問が生じたため振り返る
	11		外科・脳神経外科	両下肢切断患者の車椅子移動	L	87歳	男性	糖尿病のため、両下肢切断している患者	両下肢切断後、移動は車椅子で行い、以上には介助が必要であるため振り返る
	10.11		整形外科	大腿骨頸部骨折患者の「リベ」リフティングと移動動作	M	71歳	女性	左大腿骨転子部外側骨折の患者	術後20日目で体重免除免除の指示が出ている。術後26日目、軽度の肺炎で呼吸困難の恐れがあるため、リハビリ開始の前にパルスオキシメーターを付けて、SpO2を測定し、体重1/3まで荷重制限の指示が出ておりそのリハビリを振り返る
	12	M病院	内科・外科・皮膚科	大腸内視鏡検査（下部消化管内視鏡検査）について	N	79歳	女性	胆嚢結石症および貧血の原因精査のために入院した。右股関節骨折と左股関節人工骨頭置換術を行っているため、介助により歩行している患者	検査を行う前から退院までの一連の流れ（処置や観察項目）をデモンストレーションし、下部消化管内視鏡検査の特徴を共有するため振り返る
	13		循環器	循環器病棟での検査の流れ—冠動脈造影検査（CAG）を通して	O	68歳	女性	狭心症と診断され、CAGを受ける患者	検査を行う前から退院までの一連の流れをデモンストレーションし、循環器疾患の特徴を共有したいから振り返る

■ おわりに

学習を進める上で、2年生後期の2月から3月にかけて基礎看護学実習Ⅱを終了してから約10ヶ月間、各論実習開始までの時間が長いことは否めない。各論実習初期にあたる2003年10月から11月の6週間、3年生を対象に、デューイの反省的思考を用いた成人看護学臨地実習Ⅰを行った。この反省的思考を用いたことによる学習効果や教育評価に関しては、次回に譲るとして、今回は実施報告に留める。

告に留める。

- 1) ジョン・デューイ (John Dewey): 1859-1952年没は、アメリカのヴァーモント州のバーリントンに生まれた。現代アメリカのプラグマティズム (pragmatism 実用主義) の代表的学者として、その活動は哲学・心理学・教育学など多方面にわたり、数多くの著書、論文を出している。デューイは長い生涯にわたり学問的活動を続けた。本論文では「思考の方法—いかに我々は思考するか—」を基にしている。この原著初版は1909年に公表され、1933年に改訂増補版を著している。デューイ哲学は、ジェームズ (William James) 心理学を一機縁として出発し発展したダーウィン主義もしくは進化論の立場からすることに対して、強い示唆と刺激を与えている。デューイは、意識生活にも生物の外形的生活に働く進化の法則と同一の法則が働くと見る。つまり精神の発展にも身体に至る生命体の発展と同様な法則が働くと見ている。この立場から思考作用を究明している。
- 2) 阿曾洋子: 看護過程 (ナーシングプロセス)。氏家幸子・阿曾洋子, 基礎看護学技術II 第5版, 医学書院, 東京: 233, 1994.
- 3) 佐々木秀美: 看護教育における思考訓練の重要性—デューイの反省的思考論を手がかりに。明星大学 教育学研究紀要 第18号: 39-47, 2003.
- 4) John Dewey: How we think. 植田清次訳, 思考の方法—いかに我々は思考するか, 東京, 春秋社, p.17, 1955.
- 5) ドナルド・ショーン (Donald. A. Schon) 1931-1997年没, ボストンに生まれる。哲学、音楽など様々な分野に造詣が深く、「反省的実践家」を育てる専門家教育、学習組織論の動向や業内教育システム構築を行う。「反省的実践家」については、“The Reflective Practitioner”, 佐藤学・秋田喜代美訳, 専門家の知恵, ゆるみ出版, 2001. に詳しい。そこでは新しい専門家像を示し、さまざまな専門職

において機能している専門家の知恵を事例研究によって詳細に描き出してある。

- 6) 教育心理学辞典, 教育出版, 1996.
- 7) 本田多美枝: 看護における「リフレクション (reflection)」に関する文献的考察, *Quality Nursing*7 (10), p.877-883, 2001.
- 8) 本田多美枝: Schon 理論に依拠した『反省的看護実践』の基礎的理論に関する研究—第二部 看護の具体的事象における基礎的理論の検討—, *日本看護学教育学会誌* Vol.13, No.2 Dec: 17-33, 2003.
- 9) 上野玲子ら: 看護学教育初期段階におけるコミュニケーション技術・カウンセリング技術教育についてのリフレクション, *秋田桂城短期大学紀要* 第8号: 27-44, 2000.
- 10) 田村由美ら: リフレクションを行うために必須なスキル開発—オックスフォード・ブルックス大学における教授方法実践例—, *Quality Nursing*8 (5): 419-425, 2002.
- 11) 武藤眞佐子ら: リフレクティブシンキングとグループ学習を用いた統合学習効果 成人看護学臨地実習後に連動する学内演習. *看護総合科学研究会誌* 6 巻1号: 3-11, 2003.
- 12) 村松照美: 健康学習支援における保健婦の力量形成過程の分析—澤本のリフレクション方法を活用して, *保健婦雑誌* Vol.57, No.13: 1070-1075, 2001.
- 13) 澤本和子: 教師の成長・発達と授業研究, 澤本和子: 教師の発達を支える授業リフレクション研究方法の開発, 平成7年度～平成9年度 科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号07680226研究報告書: 1-72, 1998.
- 14) 辰巳理恵: 臨地実習における指導者の関わり—リフレクションのプロセスをとおしての見方の変化—, *神奈川県立看護教育大学校 看護教育研究集録* No.27, p.107-113, 2002.
- 15) 吉村恵美子: 教師がリフレクションをする意味について—成人看護学「呼吸機能障害患者の看護」の授業展開を振り返って—, *神奈川県立看護教育大学校 看護教育研究集録* No.23: 1-7, 1998.
- 16) 永井睦子ら: 看護教員研修における授業研究とその意義—仲間との共同による差異化リフレクション, *神奈川県立看護教育大学校紀要* 第26号: 1-8, 2003.
- 17) 青木由美恵: リフレクションの実際—Gibbs のリフレクティブ・サイクルを活用して—, *Quality Nursing*9 (2), p.147-156, 2003. 佐々木秀美: 看護教育における思考訓練の重要性—デューイの反省的思考論を手がかりに, *明星大学 教育学研究紀要* 第18号: 39-47, 2003.
- 18) 7) 前掲書 p.877.
- 19) 3) 前掲書 p.44.
- 20) 3) 前掲書 p.46.
- 21) 中津川順子: デューイの経験論と実習教育, *Quality Nursing*5 (8), p.577-582, 1999.
- 22) 3) 前掲書 p.44.
- 23) 3) 前掲書 p.41.